

# 異文化理解のための非言語教育：英語教材を使用しての Nonverbal Communication に関する一考察

Yukiko S. Jolly

## I. はじめに：目的と内容

筆者は過去2年間継続して、セミナー教育のテーマとして「非言語コミュニケーション（ノンバーバル・コミュニケーション）」を採用してきた。学部3年前期に始まり4年生後期までの丸2年間における非言語コミュニケーション学の教育内容を、英語教材を使用し、必要に応じて日本語で説明するというバイリンガル方式で主として英語で講義を行い、ディスカッションやスピーチ、レポート作成、ファイナル・プレゼンテーションも英語で実施するという授業法を試みてきた。そのような（1）非言語コミュニケーション内容と（2）バイリンガルの教授法を通しての異文化理解のための教育に対して、アンケートによる学生達の反応資料を中心として、その教育的意義を分析、考察するのが投稿の目的である。

当該クラスに対する調査は、文学部英文学科及び国文学科3～4年次にわたる合計2年間の授業が終了しようとする学生達を対象として、4年の後期、最後の週から数えて2週目に各自の2年間のゼミ授業を振り返っての無記名式アンケートに記入させた結果を中心に分析、解釈したものを中心として考慮するものである。当セミナーは19名で構成され、内男子学生が一人含まれている。

アンケートは2部より構成され、第1部（アンケートA）は学生の非言語コミュニケーションを学習したことへの反省を通して、その教育的意義と彼らが将来に向けてのその学習内容の有効性を考慮するものである。後半の第2部（アンケートB）の質問内容は当「非言語コミュニケーション」のクラスで（1）英語の教材を主として使用したこと、（2）英語で記述したレポートを毎学期末に提出したこと、（3）毎週、まえもって準備してきた数分の英語のスピーチを1名ずつ計2名が、全員の前で行い、その後各々質疑応答の形で会話のやりとりをすることによって英語で発信し応答をするというコミュニケーション技術を練磨したこと、（4）4年次の最後の学期には、それまで1年半を費やして各々が選んで研究してきた自分の好きな国、或いは民族の特色及び非言語コミュニケーション的特徴について発表することを中心としたプレゼンテーションを英語で、視聴覚教材を用い

ながら一人約30ないし40分間使用して発表し、質疑応答を受けたこと等の項目への反省と評価、及び将来への方向付けへの推薦等について回答させた。

## II. アンケートの内容

### 1. 「アンケートA」と「アンケートB」

以下は今回使用した非言語コミュニケーション教育に対する学生の反応を調査するアンケートの質問内容である。

#### アンケートA コース名：言語文化演習Ⅱ（コミュニケーション論）

あなたは約2年間、当「非言語ゼミ」に参加し、英語の教材を使用しノンバーバルコミュニケーションを勉強してきました。この経験に基づき以下の質問に1つ丸をつけて下さい。

1. 二年前と比較して、外国の非言語について(a. 少し理解 b. 理解 c. 良く理解 d. 広く理解) できるようになった。
2. 二年前と比較して、外国の非言語について (a. 少し興味 b. 興味 c. かなり興味 d. 深く興味) を持つようになった。
3. 二年前と比較して、周囲の人々の日常の社会行動が (a. 少し理解 b. 理解 c. かなり理解 d. 良く理解) できるようになった。
4. 二年前と比較して、自分の非言語行動を (a. 少し意識 b. 意識 c. かなり意識 d. とても意識) するようになった。
5. 非言語を学んだことにより、日常のコミュニケーションが (a. 少し上手 b. 上手 c. かなり上手 d. とても上手) になったと思う。
6. 非言語を学んだことにより、就職活動（支援準備講習、会社説明会、面接）に (a. 少し役立った b. 役立った c. かなり役立った d. とても役立った) と思う。
7. 非言語学習を後輩たちにも (a. 少し推薦 b. 推薦 c. かなり強く推薦 d. とても強く推薦) したい。
8. 非言語ゼミを履修して (a. 余り効果がなかった b. 少し効果があった c. 効果があった) d. 大きな効果があった) と思う。

9. 当ゼミの非言語学習について何でも感じたこと、意見があればどうぞ。

アンケートB コース名：言語文化演習II（コミュニケーション論）

次に当ゼミでの英語のカリキュラム（教材、スピーチ、レポート、プレゼンテーション等）について

1. 教科書『Eye to Eye』の内容、英語のレベル、難易度などは (a. 不適當 b. やや不適當 c. 適當 d. とても適當) である
2. 教科書の進め具合は (a. 遅過ぎる b. やや遅い c. ちょうど良い d. 早過ぎる)
3. 毎回の英語スピーチの練習は (a. 役立たなかった b. 少し役立った c. 役立った d. とても役立った)
4. 3年次7月提出のマージョリー・F・ヴァーガス (Marjory Vargas) の「非言語コミュニケーション」についてのレポートは (a. 役立たなかった b. 少し役立った c. 役立った d. とても役立った)
5. 今学期の英語での 自分自身のプレゼンテーションの経験 (Bibliography, Outline, Research, and Delivery)は、(a. 役立たなかった b. 少し役立った c. 役立った d. とても役立った)
6. 今学期の英語での級友のプレゼンテーションは (a. 為にならなかった b. 少し為になった c. 為になった d. とても為になった)
7. 二年前と比較して、英語の hearing 能力が (a. 少し b. 大分 c. かなり d. とても) 上達したと思う。
8. 二年前と比較して、英語の speaking 能力が (a. 少し b. 大分 c. かなり d. とても) 上達したと思う。

9. 二年前と比較して、英語の reading 能力が (a. 少し b. 大分 c. かなり d. とても) 上達したと思う。
10. 二年前と比較して、英語の writing 能力が (a. 少し b. 大分 c. かなり d. とても) したと思う。
11. 全体として当ゼミを履修して英語力が (a. 少し b. 大分 c. かなり d. とても) 上達したと思う。
12. 当ゼミの英語カリキュラム (教材、スピーチ、レポート、プレゼンテーション) について何かコメントがあればどうぞ。

### Ⅲ. アンケートの回答の分析

回収した19部のアンケートの結果を一覧表にすると以下のようになる。

#### アンケートA

質問	選択肢	a	b	c	d	合計 (人)
問 1		0	7	6	6	19
問 2		0	3	7	9	19
問 3		5	7	1	6	19
問 4		3	6	7	3	19
問 5		12	3	4	0	19
問 6		5	9	1	4	19
問 7		0	9	4	6	19
問 8		0	3	9	7	19
合計 (人)		25	47	39	41	152

## アンケートB

質問	選択肢	a	b	c	d	合計 (人)
問 1		0	2	13	4	19
問 2		0	6	13	0	19
問 3		0	6	8	5	19
問 4		1	6	11	1	19
問 5		0	0	7	12	19
問 6		0	1	6	12	19
問 7		11	2	5	1	19
問 8		11	1	6	1	19
問 9		4	9	2	4	19
問 10		10	3	2	4	19
問 11		6	5	5	3	19
合計 (人)		43	41	78	47	209

## 2. 「アンケートA」の解釈

まず、「アンケートA」の非言語ゼミに関して、その学習内容について尋ねた質問への回答の分析を以下に行う。

問1への回答はb、c、dにほぼ均等に分布しており、反応は肯定的で学生は非言語について理解できるようになったとみて間違いないであろう。問2に関してはb、c、dと進むに従って、回答数が増えておりdの「深く興味を持つようになった」が9名で約50%足らずを占めている。cとdを合わせると興味を強く持つようになったと判断してもよいであろう。次に問3であるが、これはa、b、及びdに分かれて分布しており、一番多いのは「よく理解できるようになった」であるが、cの「かなり理解」が1名しかいないことが、研究者にとっては不審な点である。問4はcが7名で自分の非言語行動を「かなり意識するようになった」というのが一番多い。問5についてはaが12名で一番多く、日常のコミュニケーションがあまり上達していないという印象が強い。問6の統計はbが9名で「役立った」であるので、bとc、dの肯定的な反応を合わせれば14名になり、過半数を占めるという数字になる。問6に関してはばらつきがあり、近年の就職難を反映していることもあろうが、就職先より内定を一つまたは二つ以上受け取った学生にとっては、個人的に話しを聞いた結果によると、「とても役立った」という反応も2、3人から得た。問7の

統計ではbが9名、dが6名でbが一番多いのであるがb、c、dの肯定的な反応を合計すれば、それが全員の19名であるということになり、後輩たちへの「推薦したい」という態度が顕著である。問8はcが9名、dが7名で計16名の大半を占めるので、「効果があった」或いは「大きな効果があった」と言えるだろう。「アンケートA」における以上の選択肢による問8への回答に関しては、ほぼ全問に対して肯定的な返答が寄せられたと見なしてよいだろう。

次に問9であるがこれは自由に意見を述べさせる欄である。以下のようなコメントが寄せられたので、それ等の内容を要約して引用する。

#### (1) 学習できた事柄

1. 相手の文化のことまで考えるという意識が変わった。
2. 授業で勉強したことを次の日に経験したということが何度もあった。
3. これから海外へ行くときなど、ジェスチャーなどの非言語を前もって調べていくと面白いと思う。
4. 様々な非言語の発表は自分なりに研究できたし、多くの国についてそれぞれが分担して調査したことにより、より深く知ることが出来た。
5. 授業で学んだ非言語を、日常生活のいろいろな場面で活用していきたい。
6. 先生の体験談を聞くことや、ゼミ生と交わすディスカッションは、楽しかった。
7. 非言語は言葉以上に明確で正直だと思う。海外に行く際にはその国の非言語についてしっかり見てきたい。
8. 授業についていくのに必死であったが、非言語に興味を持つことができた。
9. 非言語や英語を一気に勉強できてよかった。
10. 日頃、無意識で行っていた非言語表現を意識するようになり、とても興味を持った。
11. 他文化の非言語コミュニケーションを学べたことは非常にためになった。中でも『自民族中心主義』の話は自分の考えを見直す良い機会となった。
12. 異文化の交流において、自分の文化が必ずしも正しいのではないと常に念頭においておくことが大切だと感じた。
13. より多くの非言語コミュニケーションを知ることで外国人のふとしたしぐさの意味するところがわかってくるのはおもしろい。
14. 非言語に敏感になることができた。

#### (2) 将来への提案

1. 世界の非言語に関するビデオ導入の機会を増やして欲しかった。
2. 実際に外国の非言語に触れる目的のためにゼミ合宿として海外研修に行きたかった。
3. 分類表を作成するなどして、それぞれの国の非言語について比較したり、もっといろいろな国のことも知りたかった。

4. 日常的な非言語について具体的な経験を聞きたいので、もっと話し合いの機会を設けてほしかった。
5. 一つのトピックについて深くディスカッションするのも面白いと思う。
6. ゼミは楽しい中でも、勉強面については厳しくやりたかった。
7. 先生との距離が感じられた。個人的に何でも話せたり、一緒に夕食を食べに行ったり悩みも話したりしたかった。ただ、先生との関係は社会人になっても、自分で積極的になれば可能だと思う。
8. 自分が体験したことを話したり、議論したりする場があるといいと思った。
9. もっと先生やゼミ生とコミュニケーションがとれると良かった。

### 3. 「アンケートB」の解釈

次に当ゼミは非言語コミュニケーション学の内容を学ぶという目的に次いで、学生のバイリンガル能力育成が2番目の目的であったので、授業中はもとより、授業外でも極力英語を使用し、教材においても或いはクラス内での作業においても、四つの英語技能を強化拡大するよう努めた。従って毎回使用した教科書及びハンドアウト（プリント）、毎回の授業における2名ずつの英語での2、ないし3分間の自由テーマのスピーチ、そして毎学期末に提出したレポート及び4年生後期において、毎クラス時2名ずつの英語でのプレゼンテーション、（これは3年生次から各々が希望した国または地域などを選択させ、その国の地理的特色、人口学の概要いわゆる「デモグラフィー」、主要産業などの地域研究としての概要をイントロダクションとして紹介したあと、非言語伝達の下位分野、それぞれの特徴について詳細に説明し、質疑応答を含めて一人40分内に発表するようカリキュラムを組んだ。「アンケートB」はこれらの英語のカリキュラムについて回答させたものである。

問1についての解答はcが13名で大半であるので、教科書は適当であると認めていいだろう。問2は進行速度についてであるが、やはりこれもcが13名で一番多く、ちょうどよい速度であるという結果がでた。教師の希望としては学習進度を早めたいという意図もあったが、教科書内容に関しての発音、文法、語彙説明、或いはラテン語、ギリシャ語を基盤としたワードルーツ・アプローチ（語源方式）による説明、それに関連する逸話、教師の経験などを話すことにより肯定的に、興味深く学習できるという動機付けを考慮した場合、やはりそこには理想の速度と現実の速度には差があったと認識している。問3の英語のスピーチの練習についてはbが6名、cが8名、dが5名という回答で、bから上の肯定的な反応が全てである。従ってスピーチ訓練は来年も続行したいと考えている。初年度のゼミでのスピーチは各自の自由な身近な題材について毎回発表させたものであるが、将来のゼミ学習2年目については、それをよりフォーマルな形のロジカルな「スピーチ・プレゼンテーション」にもっていきたいと計画している。問4はヴァーガス著の原書を和訳した「非言語コミュニケーション」について、全体から2つの章を選び、概要と読後感を英

語でレポートさせたものについてである。これはbが6人、cが11人で真中あたりに集中し、「少し役立った」及び「役立った」というのが多いが、教師の予想としては非言語コミュニケーションという全体のフレームワーク及び、その下位の各々のカテゴリー、そして国際的にみた非言語コミュニケーションの分析と事例を考慮すれば、学生の回答はcとdに集中するだろうと考えていた。問5は圧倒的にcとdが多く、dは12名を占めていて「とても役立った」という結果でこれは最後の問12の自由記述の紙面でも、やはりこの点が肯定的な表現で数多くの学生によって再度強調して記入されていたことも考慮すると、当初の3年生後期のBibliographyの提出、4年生4月提出の発表のためのOutline、及びその時点から開始するResearch、そして最後の学期のDeliveryまでの、合計2年間かけて準備した自分自身のプレゼンテーションの経験が彼らの英語力、及び異文化コミュニケーション学、そして非言語コミュニケーションの各国の事例を理解するのにとても有意義である作業であったと筆者も確信している。問6の結果はcとdに集中し、特にdが12名(63%)で大半を占めており「とても為になった」が圧倒的である。級友のプレゼンテーションにも強い関心を見せ、プレゼンテーション後に英語での質疑応答ができたことを、筆者も肯定的に受け止めており、この方式の授業活動は今後も強く推進してゆきたいと考えている。問7の英語そのものの技術の向上に関しての、まずhearing能力であるが「少し」というのが11名で一番多く、その次のを飛ばしてcの「かなり」というのが多い。これは学生自身の自分の言語能力評価についての質問であるので、客観的な評価による数値としては出にくい質問であり、又出しにくい答えであると思う。やはり彼ら自身が希望する能力にはまだ至っていなかったという反応だと見なせばよいのであろうか。問8であるが、これも同じようにaが11名で一番多い。不可解なのはaとcに偏り、bとdが1名ずつという現象である。問9に関しては少し変わっており、bが9名で一番多く「大分うまくなった」の「大分」と「かなり」という質問表現の仕方についても、やはり主観的な言葉の意味の強度に関する解釈の仕方に相違があるという事実も、ぶれが生じた可能性として考慮される。問10であるがaが10名で一番多かった。換言すればwriting能力がこのコースによって上達したと考える学生達が大分であると考えてよいであろう。これは毎学期末に提出させた記述によるレポート、及び最後の口述によるプレゼンテーションであるが、まず彼らは英語で下書きして準備したからではないかと筆者は考える。問11については全体を通しての英語力に関しては広く分布しており、aの6名が一番多く、段々と数が一人二人少なくなっていることが特徴である。言い換えれば期待したほどは高くなってはいないが「少し」或いは「大分」上達していると考えていいであろう。

以上、選択肢による答えに関しては上半分はどちらかと言えばc以上に偏り、下半分の英語能力に関してはc以下に偏ったという、二極偏在の状況がある程度把握されると言えるだろう。次の問12の自由記述の欄であるが、彼らが無記名で自由に記載した内容を列挙してみる。



(1) 学習できた事項

1. 文法などのレベルはちょうど良かった。
2. 最後のプレゼンテーションでは、一人一人が違った国を担当し、とことん調べること  
でその国についてより深く知識を身に付けることが出来たことが本当に良かった。また、この発表に向けて、留学生の子に何度も英語をチェックしてもらい練り直したことにより、自分自身の英語力アップと自信に繋がった。
3. スピーチは自分の為にも、ゼミ生全員の為にも行って良かった。また、自分に対する自信にも繋がった。
4. プレゼンテーションのために準備できることを早めにやっておくのにBibliography、Outline等の提出を決められたのは良かった。
5. ゼミの総まとめを自分なりにすることができ、また非言語の勉強の大切さと、面白さを知ることが出来たのでとても良かった。
6. プレゼンテーションはとても良い経験となった。speaking については少し自分に自信が付き、アルバイト先に来た外国の方とも何の抵抗もなく話すことが出来た。
7. レポートを全て英語で行ったことは大変良かった。今後も英語学習を続けていきたい。
8. 自分が調べたことを発表することは、英語能力を上達させるのに大変効果があった。また、友達の発表を聞くことは楽しく多くの国の非言語や特徴を知ることが出来た。
9. スピーチやプレゼンテーション準備は大変だったが自分の英語力を試す意味で非常にいい経験になった。
10. 英文読解が中心の為、最初の内は苦痛だったが時間を掛けて分析していくうちに、読めるという喜びを知った。今後は非言語に限らず、興味のあるジャンルの本を原書で読んでみたい。
11. 先生の高い要求をなんとか自分なりにこなすことができ、達成感を感じている。
12. 教科書『Eye to Eye』には、写真や図が多く掲載されており非常に分かりやすかった。また、先生の実体験を聞くことにより、さらに理解を深めることが出来た。
13. 級友のプレゼンテーションは自分の知識を増やす為にも大変役立った。
14. 最後のプレゼンテーションでは、事前に一つの国について調査し、それを英訳した上で発表の構成を考え、30分に及ぶ英語の発表をしたことは、とても大きな自信につながった。今後もこの経験が役立つと思う。
15. TOEICスコアが100点上がったので、ヒアリング力がついたと思う。
16. 教科書は副教材として、自分達で準備をしてきて、授業では先生の話の聞いたりディスカッション等したことが面白かった。1年生から学んできたプレゼンテーションの方法を実際に生かす機会を持つことが出来、いい経験となった。
17. プレゼンテーションは英語力の向上や研究した成果を発表できるという点で良かった。この2年間で、これから将来に役に立つことを沢山学べた。

## (2) 将来への提案

1. テキストは抽象的な文が多く、日本語でも理解するのが難しい部分があった。
2. 前の授業や、その章の今までの内容の再確認をして貰えると良かった。また、授業の最後にその日の内容の要旨を言ってほしかった。
3. 教科書が全部読みきれないうちにプレゼンテーションが始まってしまったことが残念だった。
4. 文章が難しくて訳すのに必死だったので、読解力はかなり身についたが、会話能力まで身につけることは出来なかった。
5. ビデオ鑑賞を通して、話し合ったりする機会があっても良かった。
6. 生徒がもっと積極的にスピーチ、質問などできる雰囲気があるとよかった。
7. 4年生からは、全く日本語を使わず、英語のみで授業を進めて貰ってもいいくらいだった。
8. もっと厳しい方がよかった。その一方でもっとアットホームな雰囲気の中で仲良くできれば、より良いゼミになったと思う。
9. 非言語について深く知る為に日本語のレポートやプリントがあるとよいと思った。

## III、結論と今後の方向

以上の学生の反応から、アンケートの結果はほぼ筆者が期待した結果に終わったと言っていられる。少し相違点があるとすれば、それは彼らの自己言語能力判断に関して少々謙遜的な傾向があったようにも思われる。どちらにしても一番の特徴と認識できたのは殆どの学生が自己のプレゼンテーション及び級友のプレゼンテーションに関して、とても強い肯定的な反応を示したことである。これはこのゼミの究極目的である(1)各国の非言語コミュニケーションを研究し、発表能力を育成するという点において、及び(2)その研究内容を英語で30分にまとめて発表し、その後約10分間同じく英語で質疑応答する、即ち学生の日・英語バイリンガル能力の育成という二つの目的に関して、前者に対してはとても高い関心とそして達成度が得られたと思う。後者については、今後筆者も担当教員として学生の言語能力向上のための教授法を工夫改善していく必要があると考えている。教材についてはその内容、難易度、イラスト等テキストとしての魅力性というものも今後考慮を重ねていくべきかと思う。教え方のスピード、語彙、文法及び文化的背景の説明の方法などの教授法の詳細に関しても、またこれから更に研鑽を積んで行きたいと考えている。

学生達がこの非言語コミュニケーション学を異文化理解の一端として学習することは、今後の国際社会を形成し、21世紀を担う彼らの役目として非常に重要であると筆者も認識しており、今後もこのゼミに関して更なる進歩発展につなげて行きたいと試行錯誤を続行する所存である。

## 参考文献

- 阿部一 (2000) 『空間の比較文化誌』 せりか書房
- 井上久美 (編) (1996) 『Getting Your Message Across』 成美堂
- 大坊郁夫 (1998) 『しぐさのコミュニケーション』 サイエンス社
- 嶋下一郎 (1992) 『ボディ・メッセージ』 同文書院
- 小林裕子 (1991) 『しぐさの英語表現辞典』 研究社
- 荘厳舜哉 (1986) 『ヒトの行動とコミュニケーション』 福村出版
- 渋谷昌三 (1998) 『しぐさ・動作・ふるまいの心理学』 日本実業出版社
- 杉恵惇宏 (編) (1995) 『HUMAN WATCHING』 成美堂
- 直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき』 大修館書店
- 西田ひろ子 (2000) 『異文化コミュニケーション入門』 創元社
- 西田ひろ子 (2000) 『人間の行動原理に基づいた異文化コミュニケーション』 創元社
- 野村雅一 (1983) 『しぐさの世界』 NHKブックス
- 野村雅一 (1984) 『ボディランゲージを読む』 平凡社
- 橋本満弘 (1999) 『異文化コミュニケーションに向けて』 北樹出版
- 原岡一馬 (編) (1990) 『人間とコミュニケーション』 ナカニシヤ出版
- 御手洗昭治 (2000) 『異文化にみる非言語コミュニケーション』 ゆまに書房
- 八代京子 荒木晶子 樋口容視子 山本志都 コミサロフ喜美 (2001) 『異文化コミュニケーション』 三修社
- 池田理知子 E・M・クレマー (2000) 『異文化コミュニケーション入門』 有斐閣  
アルマ
- ジョリー佐々木幸子 小池弘道 (1999) 『日本の常識はどこまで通じるか』 風媒社
- アーチャー, D (1988) 『ボディ・ランゲージ解説本』 誠信書房
- ヴァーガス, マージョリー・F (1987) 『非言語コミュニケーション』 新潮選書
- コレット, ピーター (1996) 『ヨーロッパ人の奇妙なしぐさ』 思想社
- プロズナハン, リージャー (1988) 『しぐさの比較文化』 大修館書店
- Ruben, Brent D. (1985) *Nonverbal Codes* KIRIHARA SHOTEN
- Morris, Desmond (1980) *MANWATCHING* KINSEIDO
- Morris, Desmond (1988) *BODYWATCHING* Macmillan LanguageHouse
- Bremner, Jan & Roodenburg, Herman (1991) *A CULTURAL HISTORY of GESTURE* Polity Press
- Martin, Judith N. ・ Nakayama, Thomas K. (1997) *Intercultural Communication in Contexts* MAYFIELD PUBLISHING COMPANY
- Knapp, Mark L. and Hall, Judith A. (1997) *Nonverbal Communication in Human Interaction* HARCOURT BRACE

Argyle, Michael (1975) *Bodily Communication* HOKUSEIDO  
Marsh, Peter (1989) *EYE TO EYE* MACMILLAN LANGUAGE HOUSE  
Axtell, Roger E. (1991) *GESTURES* WILEY  
Kitao, S. Kathleen and Kitao, Kenji (2002) *Nonverbal Communication* IKUBUNDO